

『社会人になってからの3年間に思うこと』

石井克弥さん

筑波技術大学 総合デザイン学科6期生

勤務先：東日本旅客鉄道株式会社 水戸支社 水戸建築技術センター

私は大学を卒業し就職してから早3年、あっという間に過ぎました。街中でスーツに身を包んだ学生らしき人々を見かけると、就職活動をしていた頃の自分を思い出します。どのような仕事をしたいのか分からず、ただ漠然と企業の説明会に出向いては話を聞いていたのを覚えています。正直なところ、人生の岐路に立っているという自覚は薄かったように思います。そのような曖昧な気持ちを抱えた当時、どのように就職し現在に至ったかまでの私の経験が役立てばと思い、今回この文章を執筆させていただきました。

どのような仕事をしたいのか、これが就職活動を始めるとあたっての最初のカベでした。初めから自分の進路をある程度筋立てている人には悩むことではないのかもしれませんが、多くの方が最初にぶつかるカベだと思います。しかも学業も並行しなければなりませんから、早く終わらせたいという気持ちも交錯することと思います。私の場合、大学で学んでいた内容が建築系だったこともあり、その知識を生かせそうな企業を探しては説明会に向いてみるというスタイルでした。それが一つのきっかけでした。やりたい仕事分からず就職活動に悩んだ時は、一度自分の原点に立ち返ってみることで、自分の経験に裏打ちされた何らかのキッカケを掴めるのではないかと思います。

ここからは就職後の話になります。就職活動をどのように進めていくか、決めた方向性をもとに何社かを受け、内定となったのが現在勤めて3年目となるJR東日本です。その中で、配属となったのは鉄道施設を手掛ける建築部門です。大まかに言えば、駅をはじめとするJR東日本が保有する建築物の新築から修繕、改良までをメイン業務としている部門です。大企業ではありますが、数多くの部門を細分化しており、少人数で専門的に行うかたちとなるため、水戸の場合ではありますが約20人前後の職場になっています。全員がプロ意識を持って臨まなければ回っていきません。

また、鉄道会社の特性上、車内には想像するよりも多数の部門があります。私が属する建築部門の場合は、工事を行うにあたっての社内調整が多いため、コミュニケーション能力はもちろんのこと、関係する部門を総括する調整力も求められます。社内だけでなく、JR東日本を支えるパートナー会社との関係も殊に重要なものです。入社後、最初の2年間で計5件の工事を担当しましたが、そのいずれでも建築部門が中心的役割を果たしつつ工事を推進していく形でした。聴覚障害者であることに多少のサポートはあります。しかし、お金を貰って仕事をしていく以上、妥協は許されません。そういった中でも、ど

のように会議でコミュニケーションを取るかが一番悩ましい問題でした。分かりやすい資料を作成し、事例を示しつつ納得させられる説明を心がけることで解決できるだろうと考えていましたが、それだけでは足りなかったのです。相手の立場に立ち、どのように懸念事項を解消していくかの検討も抜かしてはいけません。この点は障害の有無にかかわらず共通事項であり、自分の考えを一方向的に伝えるだけでは会議をする意味がありません。同じように、コミュニケーションの方法についても自分の置かれている状況をあらかじめ相手方に伝え、取ってほしい対応を具体的に（例：筆談、口話等）お願いすることが大事になってきます。学生のうちに、自分に合ったコミュニケーション手段を見つけることが肝要であるとも言えます。職場に対しては、自分の障害の特性を相手にしっかりと伝え、普段から状況に応じたコミュニケーションを取ってもらえるよう心掛けています。何事も最初が肝心であり、機を逸すると事態は好転しにくくなってしまいます。就職活動においても、入社してからの活動においても、自分の置かれる環境を改善していく努力がその後の生活にもたらす安定感を生み出すものだと個人的には思っています。

余談ではありますが、学生時代の友人も大事にすべきだと感じています。最後に卒業した学校（大学）での交友関係が一番長続きしていることもありますし、今でも東京で集まっては飲み歩いています。愚痴を言い合える仲間を持てたことも、今では大きな財産となっています。



実際にテーブルを取り囲んでの会議があり、このようなイメージで議論しています。